

「人口減少で市民が幸せになる施策について」という一般質問が、鳥羽市議会で行われました。ご存知のように、人口減と少子化に悩む市では何とかこの問題に対処しようと努力してきていますが、なかなか思ったようには効果がでてきておりません。そのような状況の中で、まるで発想を転換できるかのような今回の一般質問にわたしは注目しました。

日本の人口は関ヶ原の戦いがあった西暦1600年頃には約1200万人であったと言われています。わずか400年の間に10倍になったわけですが、近年ではその増えつづける人的パワーを利用して日本の国は大いに国力を増やしていったように思います。逆に人口が減少していくときに

は国力が弱くなっていくというところでしようが、そもそも人口が少くないということは悪いことばかりではありません。自然や資源を豊かに、ゆつたりと利用できるわけです。その典型は、ニュージールランドやオーストラリアに代表される自然豊かな国々でしょう。日本の人口密度は336人で世界で高い方から34番目です。いわゆる先進国と言われる国々で日本より人口密度の高い国はありません。ニュージールランドは15・8人の少なさであり、オーストラリアにいたっては2・8人です。日本の人たちはこれらの国へ旅行に出かけて、とても良いところであったと、大いに満足して帰ってきます。しかし自分の国の人口が減ってゆくことには納得できない

というものでしょう。人口が少なくなれば、当然国内の購買力が落ちてきますし、少なくなる過程において若い働き手として支える人たちに比べ、支えられる人々が多くなるという厳しさもあります。また、日本は世界一の借金国になりつつありますが、その膨大な借金を、人口の少なくなった国民に負わせれば返せなくなるというおそれもあります。これらのことから国をあげて、少子化を防ごうという動きがあるわけです。民主党政権となったとき、高速道路は無料になるだろう、ガソリンの値は下がるだろう、などと多くの期待があったにもかかわらず、そのほとんどが実現しにくいものであったと痛感させられています。ただ、マニフェストの大きな目玉の一つであった人口減少対策の要である子育て支援だけは、どうしても実行してもらいたい、あるいは拡充してもらいたいとわたしは考えています。一般質問の題名をきっかけに、普段わたしがお考え、あちらこちらで発言をしている話題について、述べてみました。

「人権連続講座報告」
6月2日、鳥羽商工会議所かもめホールにて、公益財団法人反差別・人権研究所みえ所属の松村元樹さんを講師に招き、人権連続講座「今日の部落問題の現状と忌避意識」を開催しました。
講座は、「同和地区出身者とは、一体どのような人を指すのか?」といった質問を皮切りに、松村さんご自身が感じられた「言葉のひっかかり」や、体験談、人権問題に関する市民意識調査などを基に進められました。松村さんの問いかける質問は、未だ根強く残る部落問題の現状と忌避意識について、深く考えさせられる内容で、大変有意義な講座となりました。
ここで、講座終了後のアンケートでいただいた意見・感想の一部を紹介します。
・松村さんの話を聞いて、自分の考えを見つめ直す機会になったと思います。自分自身も部落差別の基準が分からなくなりました。一体、人々は何を基準としているのか、もっと深く考えるべきことだと思いました。
・忌避意識は自分の中にもあると認識させられました。正しい認識を持つているだけではだめだ、と改めて思いました。
・差別とは、無知や偏見でなく、世間の見方なのだということを感じました。
市民課では、今後も、差別のない明るい社会を築くため、講演会や啓発活動など、さまざまな取り組みを行っていきます。



木田市長の



vol.79

人口減少社会を迎えて

人口が少なくなれば、当然国内の購買力が落ちてきますし、少なくなる過程において若い働き手として支える人たちに比べ、支えられる人々が多くなるという厳しさもあります。また、日本は世界一の借金国になりつつありますが、その膨大な借金を、人口の少なくなった国民に負わせれば返せなくなるというおそれもあります。これらのことから国をあげて、少子化を防ごうという動きがあるわけです。民主党政権となったとき、高速道路は無料になるだろう、ガソリンの値は下がるだろう、などと多くの期待があったにもかかわらず、そのほとんどが実現しにくいものであったと痛感させられています。ただ、マニフェストの大きな目玉の一つであった人口減少対策の要である子育て支援だけは、どうしても実行してもらいたい、あるいは拡充してもらいたいとわたしは考えています。一般質問の題名をきっかけに、普段わたしがお考え、あちらこちらで発言している話題について、述べてみました。

「人権連続講座報告」
6月2日、鳥羽商工会議所かもめホールにて、公益財団法人反差別・人権研究所みえ所属の松村元樹さんを講師に招き、人権連続講座「今日の部落問題の現状と忌避意識」を開催しました。
講座は、「同和地区出身者とは、一体どのような人を指すのか?」といった質問を皮切りに、松村さんご自身が感じられた「言葉のひっかかり」や、体験談、人権問題に関する市民意識調査などを基に進められました。松村さんの問いかける質問は、未だ根強く残る部落問題の現状と忌避意識について、深く考えさせられる内容で、大変有意義な講座となりました。
ここで、講座終了後のアンケートでいただいた意見・感想の一部を紹介します。
・松村さんの話を聞いて、自分の考えを見つめ直す機会になったと思います。自分自身も部落差別の基準が分からなくなりました。一体、人々は何を基準としているのか、もっと深く考えるべきことだと思いました。
・忌避意識は自分の中にもあると認識させられました。正しい認識を持つているだけではだめだ、と改めて思いました。
・差別とは、無知や偏見でなく、世間の見方なのだということを感じました。
市民課では、今後も、差別のない明るい社会を築くため、講演会や啓発活動など、さまざまな取り組みを行っていきます。

